猿新聞

編集・発行
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

棲み分けを考える

鳥獣害は、農家の耕作意欲を低下させ、耕作放棄地の増加の一因なっており、耕作放棄地の増加がさらなる獣害を招くという負の連鎖です。

行政は被害額を数字で表しますが、農家が受ける精神的被害はその数字には現れてはいません。

農家が被る精神的被害額は計り知れないものがあります。

野生動物がこれほど人里近くに現れるようになった背景には、森林の伐採や人工林化などの自然破壊があります。また、野生動物の絶対数が増加して、適正生育数を大きく上回っていることも考えられます。

獣害の減少対策としては、現行対策では高齢化が進むなか限界があり、適切な対策がないのが実情です。

集落周辺を金網で囲うなどの小手先の対策では鳥獣害は解決出来るという生易しいものではありません。

効果は間接的で時間がかかるかも知れませんが、野生動物が出没しにくい集落周辺の環境づくりをはかり、野生動物の適正な生息環境の保全につとめ、「棲み分け」をはかることこそ完全な獣害対策と考えます。

「棲み分け」を考えるとき個体数を増やさない個体数管理が重要です。

今年の通常国会でこの鳥獣保護法のさらなる改定が行なわれ、保護計画、管理計画を立てられるようになりました

個体数管理がいかに重要かを、シカを例にとっていうと、近年増えすぎてシカは人間の敵のように取り上げられていますが、かつては林床のササなどを食べることで、種子の芽吹きを助けて森林更新を促す役割も果たしており森林の生態系にとって重要な存在でした。

しかし、現在では増えすぎたことでその生息域の拡大によって、農林業被害にとどまらず、森林の植生破壊や土壌の流出をも引き起こしています。

次に自然林の復元です。

かつて、奥山（野生動物生息域）と人の生活圏の間には、人によって管理・利用されていた里山があり、野生動物との垣根（緩衝帯）の役割も担っていました。

昔の奥山は、実のなる広葉樹の多い自然林で、野生動物にとって格好の棲み家でした。いまは、林業の衰退で奥山は荒廃し野生動物も寄りつかない処になっています。

「国は森林の保全や復元のためにもっと予算を使うべき」だと思います。

それがひいては21世紀に向けて生物の多様性を維持し地球環境を豊かにしていくことにつながっていくことになります。

今後、中山間地域の獣害対策を考えるとき、さらなる高齢化や人口減少。

それに伴う耕作放棄地拡大が予想され、人間と野生動物とが棲み分けるエリアや境界線は大きく変わっていくことは必定です。行政はそれらを念頭に置いた計画が必要になってきます。

こんな被害が！

写真①＝イノシシぬたうち被害。写真③＝シカ踏み荒らし。

コンバインでの刈り取り不能や、刈り取りロスで大きな収獲減です、写真②＝畦畔の噴きあらし。写真④＝里芋全滅。「芋の名月」前の被害です。

何れも矢川で9月12日撮影。

サルの出没状況

名張A・B群

ニホンザルの発情期は、9月から10月頃です。

秋に交尾を目的に群れに近付いてきたハナレザルたちも、発情したメスが居なくなればまた群れを離れて行く。

中にはそのまま群れに入り込んでしまうものも居ります。秋は群れ間の出入りの激しい時期です。

指南員報告

9月のサルの動向

AB両群とも、先月のように各地の畑作物を採食というより、栽培、天然の別なく木本性の果実を中心に採食している模様です。カキ、クリについては、相当被害にあっています。各地で道路上に食痕が散乱しています。他には、アケビなどの天然の果実もよく採食しています。また、「ヌルデの虫こぶ」も好んで採食しているようです。

遊動傾向は、A群はほぼ全域を、B群は国道165線の南側を遊動していた模様です。

※「ヌルデ」ウルシ科ヌルデ属の落葉高木。ウルシほどではないが、まれにかぶれる人もいる。

※「ヌルデの虫こぶ」

ヌルデには「ヌルデシロアブラムシ」が寄生し、大きな虫こぶを作ることがある。

編集局便り

今年は、気候の関係かヒガンバナが例年よりも目立って多く咲いています。天からの贈り物です。

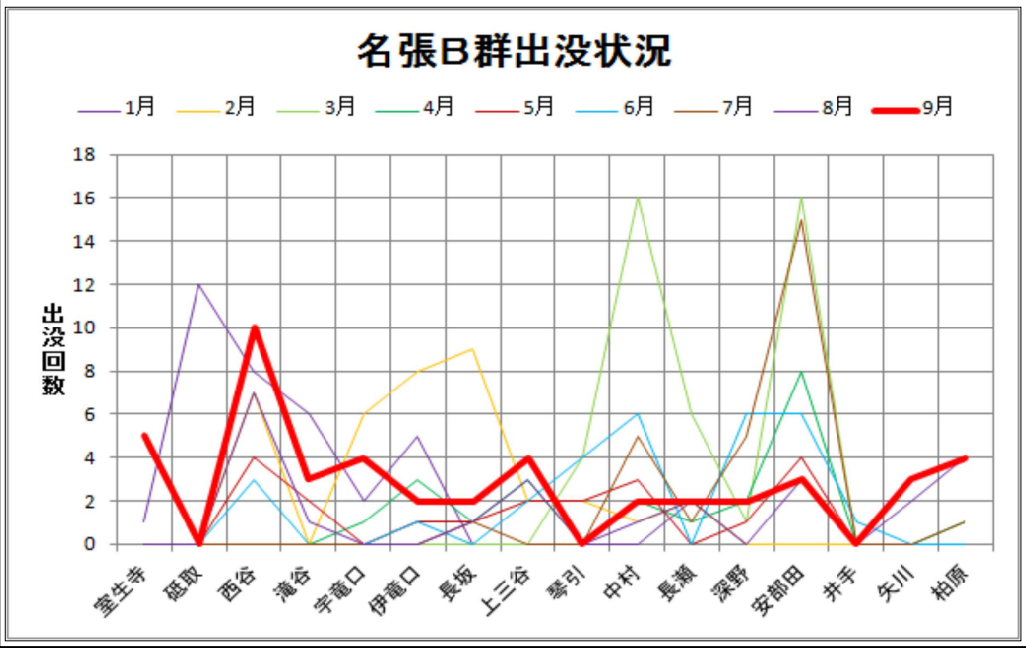
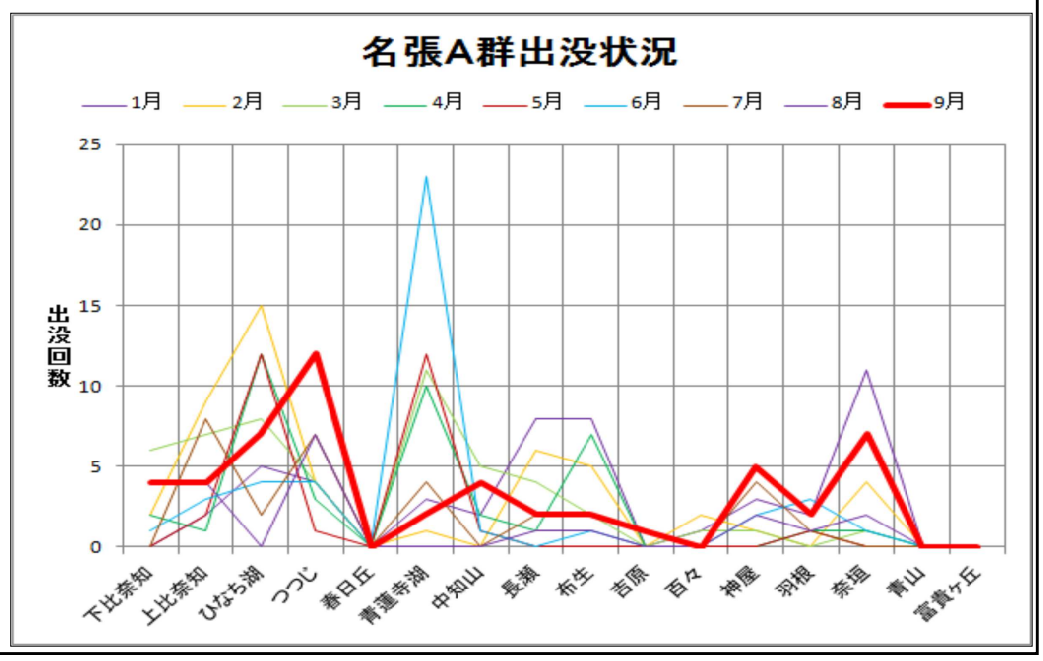
ヒガンバナの球根は、毒性が強くイノシシの掘り返しによる畦畔・法面の崩壊を防ぎます。

来年はもっと増えるように大事に育てましょう。

伊賀市真泥地区では、球根を購入してまでも植栽しています。

皆様のご指導ご協力のお陰をもちまして、猿新聞は今号で100号目と相成りました。

本紙発行の基本姿勢として、獣害に対する啓蒙、啓発に重きを置いております。

啓蒙、啓発には繰り返しが重要ですので、重複記事が目立つのはそのためとお受けとめ下さい。

尚、月刊誌の常でニュース性に乏しいところがありますが、ご了承下さい。